

●現代社会に生きる私たちは、たくさんの人々に囲まれ、SNS やインターネットを通して常に「誰か」と繋がっていながらも、心が触れ合わない「群衆の中の孤独」を経験します。そして、あのコロナ禍では、人と人との距離が物理的に引き裂かれる中で、「どうすれば離れていても心を寄せ合えるか」が私たちに問われたことでした。

使徒パウロは「私は、体では離れていても、霊ではあなたがたと共にいる」（コロサイ 2:5）と語ります。この言葉は、現代に生きる私たちにとっても希望の言葉です。パウロは近くにあっても遠くにあっても互いを覚えて祈ることを通して「霊において共にある」というつながりを感じていたのではないのでしょうか。

●本日は棕櫚の主日です。エルサレムで大勢の人々が棕櫚の枝を振り、「ホサナ（主よ、救ってください）！」と叫びながら、イエス様を王として迎えました。彼らは、ローマの支配から武力で解放してくれるメシアを待ち望んでいたのです。しかし、イエス様の思いはまったく異なっていました。旧約聖書ゼカリヤ書の預言通り、イエス様は平和の象徴である「子ろば」に乗ってエルサレムに入られました。「武力ではなく、愛と犠牲による救い」を成し遂げるため、自らを「屠られる子羊」として差し出す覚悟を固めておられたのです。しかし、すぐ近くにいた弟子たちでさえ、その真意を理解できませんでした。

●イエス様を選んだのは、まだ誰も乗ったことのない「子ろば」でした。「主が入り用なのです」と言われ、初めて人間を背中に乗せたろばは、突然の重荷に苦しんだことでしょうか。でも、そんな子ろばこそが、誰よりもイエス様の孤独を共有した存在だったのかもしれないかもしれません。山内修一さんの『子ろばの歌』は、その様子を優しく描き、「がんばれ ろばの子、イエス様、揺れてる。がんばれ ろばの子、よろよろするな オ！」と歌います。この歌には、私たちへの神様からの励ましが込められているように感じられます。

●私たちも時に厳しい状況に置かれ、その意味もわからないような苦悩を味わいます。物理的には神様と私たちには距離があります。けれども、霊においてはいつも神様が私たちと共におられ、この歌の様に私たちを労わり、励まし続けてくださっているのではないのでしょうか。イエス様の子ろばと共に、よろめきながらも一步一步進んででいかれ、そして復活の喜びが備えられた事を覚えて、私たちもまた1日1日、互いに励まし合いつつ歩んで行きたいと願います。